



校報

水糸者

No. 1276

元年度・第135号

成功する子と失敗する子

…何が「その後の人生」を決めるのか…〔その2〕

前号に続き、「非認知能力」について紹介します。

【非認知能力をめぐる、世の中の動き】

①平成30年度から完全実施されている小学校新学習指導要領で、目指す資質と能力の3点の1つに「学びに向かう力・人間性等」が位置付けられました。

なお、2020年からの大学入試が大きく変わり、現在のマークシート解答方式中心ではなく、思考力や判断力などを問う記述式解答も加わる予定でしたが、採点基準の公平性がクリアできず、既に報道でご承知の通り見送られる事となりました。

②幼稚園教育要領・保育所保育要領・子ども園の新要領にも、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿として、次の**8点**を示しています。(概要)

- ①健康な心と体 ②自立心 ③協同性
- ④道徳性・規範意識の芽生え ⑤社会生活との関わり
- ⑥思考力の芽生え ⑦言葉による伝え合い ⑧豊かな感性と表現

③成果主義、合理主義、自己主張主義、競争主義、結果主義だったアメリカが、高校や大学中退者が増加している現実を分析し、「知能」の習得だけだと不十分だったとし、非認知能力を養成する教育に転換しつつあります。

※非認知能力については、校報でも何度か取り上げてきています。

- 7月 2日発行の校報1190号「世界一寂しい・世界一自信のない日本の子ども達」
- 7月 4日発行の校報1192号「ゲームやスマホのやり過ぎはこんなも危険！」
- 7月 8日発行の校報1194号「ぼくもわたしも大切な存在」
- 7月19日発行の校報1201号「生活習慣で学力に差！！」
- 8月26日発行の校報1211号「雨ニモアテズ」
- 9月 4日発行の校報1217号「脳力の日」で心も体も開放中！
- 12月 5日発行の校報1266号「A1時代に淘汰されない

『学力』とは・パート1～5」



【国内の教育関係者や医師が話している事】

①日置光久先生（東京大学 海洋アライアンス海洋教育促進研究センター特任教授）

日置先生は、海洋教育の担当者でもありその縁もあって何度も洋野町に来ています。その日置先生が、文部科学省初等中等教育局視学官だった時に、全国公立学校教頭会研究大会（平成21年7月28日；千葉市）の中での講演で「人と人が関わっていく事が教育の基本であり、「人間関係力」が西欧では重視されている。新しい時代の「学力」といってもいいだろう。」と、『非認知能力』の重要性を述べていました。

②小坂敏雄先生（盛岡中央ゼミナール 前校長）

多くの予備校生を、希望する大学へ入学させることで、全国的に有名だった小坂先生は八戸市内のある高校の進学講演会で、「私は、大学入試のプロですので受験生が希望した大学には入学させることはできます。しかし、せっかく入学しても、途中でやめてしまう生徒が多かったの、目先の点数を獲るだけの指導でなく「社会人としての基礎能力要素」も並行して指導している。」と話していました。小坂先生が話した「社会人としての基礎能力要素」とは、下のとおりです。これまた『非認知能力』の事ですね。

【社会人としての基礎能力要素】

能力要素	内 容	例として
働きかけ力	他人に働きかけ、巻き込む力	「やろうじゃないか」と呼びかけ、目的に向かって周囲の人を動かしていく。
傾 聴 力	相手の意見を丁寧に聴く力	相手の話しやすい環境をつくり、適切なタイミングで質問するなど相手の意見を引き出す。
ストレスコントロール	ストレスの発生源に対応する力	ストレスを感じる事があっても、成長の機会だとポジティブに捉えて肩の力を抜いて対応する。

③明橋大二先生（富山県・富山病院心療内科部長、小児精神科医）

2年続けて行われた、洋野町地域包括支援センター主催の「子育て講演会」で『子どもの心の育て方』と題して講演された明橋先生は、『自己肯定感』が低い子に「しつけ」や「勉強」をさせると、ますます低下していく。ルールを守ったり、人にやさしくできる事の土台は『自己肯定感』であり、その育成に手遅れはない。「大切な子」だという、メッセージを送り続ける事が大切。子どもにとって一番大切なのは『自己肯定感』である。

どうして低くなるのかと言えば大きく4つある。一番大切にされなければいけない時期の「虐待」や「いじめ」の他、『関わりが希薄な家庭』の影響がある。」と、『非認知能力』の大切さを述べていました。

なお、明橋先生の講演内容については、7月8日発行の校報1194号でも紹介しています。

【今後、私たち大人が留意しなければいけない事】

非認知能力は、確かに幼児期での育成が重要ではありますが、小学校入学後でも十分に養う事ができるものです。私たち大人が、非認知能力の重要性をしっかりと理解し、ふれあいと安らぎのある子育てと教育活動を行う事と五感（視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚）を刺激する体験活動、自己肯定感を高める日常活動を繰り返すことが大切となってきます。

◇「明日のテストの点数が3点や5点上がればそれでよい。」といったような、目先の学力や『A1』に駆逐されるような、表面・表層的な知識の獲得だけを目指す家庭教育や学校教育からは、心豊かな種小っ子は育まれていかないのです。「頭は良い人」を育むのではなく、種小っ子が「頭が良く、賢い人」に育っていくよう、本校は今日も教育活動を進めています。